

若き日を導いた言葉



みずほフィナンシャルグループ特別顧問
経団連中国委員長
日本・韓国経済委員長

さとう やすひろ
佐藤 康博

入社7年目でニューヨークの現地法人へ初めて海外赴任した時のことである。

私は米国の税制を活用した「Tax Finance」のアレンジを担当しており、当時、大切な取引先である日系企業の米国工場のsale & lease backの大型案件に取り組んでいた。

案件は順調に進捗した。資産を保有してもらう米国企業との交渉も終わり、取引先の日本本社取締役会での最終報告も終了。あとは契約締結日を待つばかりとなっていた。その締結日が2週間後に迫ったある日、顧問弁護士から「この工場がある州では、この種のファイナンスは認められないという判決がおよそ70年前に出されている」という衝撃的な報告が舞い込んできた。

私は言葉を失い、決算期を控えた取引先にかける大変な迷惑を想像して、目の前が真っ暗になった。しかし、とにかく現法社長に報告しなければ、と思い、社長室に飛び込んで事情を説明した。

「何ということをしてくれたんだ」という罵声を浴びるものと覚悟していたが、社長は私の

報告をじっと聞き入り、その後一息ついてから、私の眼を真つすぐ見て、はっきりした口調でこう告げたのだ。「わかった。とにかく2週間、全力で解決策を考えてくれ。最後の責任は私が取る」と。

私はその言葉に胸を打たれ、それからほとんど一睡もせず解決策に取り組み、1週間後、見つけ出したたった1件の過去事例をもとにこの判決の抜け道を見いだし、ギリギリのタイムミングで事なきを得ることができた。

あの時、あの社長の力強い言葉がなければ、果たしてあそこまで死にもの狂いでトンネルの出口を見いだそうとしただろうか。

私はあの時、人の上に立つ者のリーダーシップの一つの重要な要素を身をもって学習した気がする。

「Leadership is the ability to hide your panic from others.」

何があっても心中の動揺を外には見せず、覚悟をもって部下を守り、自らの責任を全うする。それこそが上に立つ者の矜持（きんじ）であることを、私はこの社長の言葉から学んだのだ。